

# Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2016年11月21日発行 No.22

『兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。』

(新約聖書 ルカによる福音書 第23章 36~38節)

<秋の深まりと共に、今一度見つめたい「原点」と「命」!! 秋のチャペル・ウィーク開催!!>

先週からチャペルには大勢の学生、特に経済・リハ両学部1年生の姿が見られるようになりました。その理由は、1年生が全員履修している大学基礎論の授業を一コマ頂いて「秋のチャペル・ウィーク」を開催しているからです!! 春に行われたチャペル・ウィークでは、入学直後ということもあり、キリスト教や特に聖公会の概要が主な内容だったのですが、約半年間KIUで過ごしてみて、改めて自覚して欲しい「仕える生き方」(建学の精神)、そして私たち一人ひとりが持つかけがえのない「命」について約30分の講話を行いました。

世界各地で紛争が起こり、自然災害は後を絶ちません。イギリスやアメリカの選挙結果が驚きをもって報じられ、これまでとは違った方向で世界が動き出しているような、漠然とした不安を感じる事が多い現代社会。しかし、その中で互いの「命」を大切にしながら、共に「仕え」合う生き方こそが真の平和を作り出す道であり、何より約半世紀前から創立者の八代斌助師父によって示されてきた、神戸国際大学の大切な土台です。講話を真剣な表情で聴いてくれた学生さん一人ひとりが、神戸国際大学で「仕える」生き方を学んで世に出ていく。これが、悩み多く、また闇深い社会の中における一筋の希望の光となる…。そんな予感を抱いた一時間でした。



まずはオルガン演奏で心を静める



映像と共に「命」の話をしました



みんなの心に届いた…かな?



リハ学部は約90名!! 満員御礼!!



中原チャプレンも講話を担当



先生方のご協力にも心から感謝!!

## <先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

11月14日(月) 前田 次郎(理事長) テーマ「主イエスの慰めの言葉」

今日の聖句「疲れた者、重荷を負う者はだれでも私のもとに来なさい」は、深い慰めを与えてくれる有名な箇所だ。困っている時、悲しい時、自分の力が及ばない時など様々な障害に直面した私たちを支えて下さる。ここに出てくる「軛(くびき)」とは牛の首に掛ける重い農具であるが、私たちも老いや、若さや、立場や、男・女など人間としての様々な「軛」を背負っている。「これがなければどれほど楽だろうか…」と思うこともあるが、これこそ神が自分に与えられた大切な「軛」であり、同時にこの「軛」をお互いに担い合う事で、大切な関係が生まれる。実は「軛」こそ、神が与えて下さった大切な恵みである。

11月15日(火) この日は音楽礼拝でした。メディテーションとしてオルガニストの伊藤純子先生の演奏するクリスマスの聖歌に皆で耳と心を傾けました。

11月16日(水) 毛 丹青(経済学部) テーマ:「知る事のカ」

iPhoneなどを作ったスティーブ・ジョブズが、なぜ数々の発明をできたのか?彼はアメリカ人であるが日本の文化に強い関心を持ち、日本文化の根底に流れている「知恵」を求めた。それは言い方を変えると「知る事のカ」と言える。SONYの創始者である盛田氏が世界を席卷できたのはなぜか?彼はNYの街角で人々を観察し、そのデータをウォークマンの開発に生かした。そこにも「知る事のカ」の存在がある。作家の村上春樹が中国語版を出版する時のお手伝いをしたが、彼の働きを支えているのも「知る事のカ」だった。自分の世界を広げてくれる「知る事のカ」。今の学生と話をしていて残念なのが、この「知る事のカ」を求めない姿勢だ。ぜひ求める事を大切に、貴重な学生生活を有意義に過ごして欲しい。

11月17日(木) 遠藤 雅己(経済学部) テーマ:「魂の言葉」

TVで報道されたアメリカの大統領選挙。相手を罵り合う醜い映像を見ていると、アメリカ聖公会からメールが届いた。選挙後、有色人種をサポートしてきた教会の壁に差別的な落書きが行われたそうだ。これは海外だけの話ではない。大阪のヘイトスピーチは、攻撃的な言葉を相手にぶつけて自分の不満を解消する行為だが、これによって日本人の品格を貶めている。絆を保つための「言葉」は、真理を示す反面、人を傷つける力も持ち合わせている…そんな事を考えていると石牟礼道子の「花の文」に出会った。水俣病で苦しむ娘が紡いだ言葉を知った若者が、墓を訪れ花を献げるそうだ。魂から語られる言葉の力を強く感じた。

11月18日(金) 中原 康貴(チャプレン) テーマ:「映画『天国はほんとうにある』」

先日、「天国はほんとうにある」という映画を観た。日本での扱いは小さかったが、アメリカでは大きな反響があった作品で、急性腹膜炎になった子供が、困難な手術を受ける中で天国の様子を幻で見る…という内容だった。「若かりし姿の祖父に出会った」という子供の声を信じる牧師の父と、そのような非現実的な話を信じない信徒の姿、「こんな話をするなら教会を出ていく」とまで言われているシーンに、目前で起こっている事柄を目で見て確認しないと信じられない人間の弱さを感じた。皆さんは「天国を本当に見た」と言われたらどう思うだろうか? 「そんなバカな」と思う人も多いかもしれないが、今日の聖句「天の国はあなたがたの間にある」は、私たちがお互いに心を通わす所に、真の幸せ(=天の国)がある事を表している。目に見える事ばかりに捉われるのではない生き方を大切にしたい。

(文責:野間 光顕)